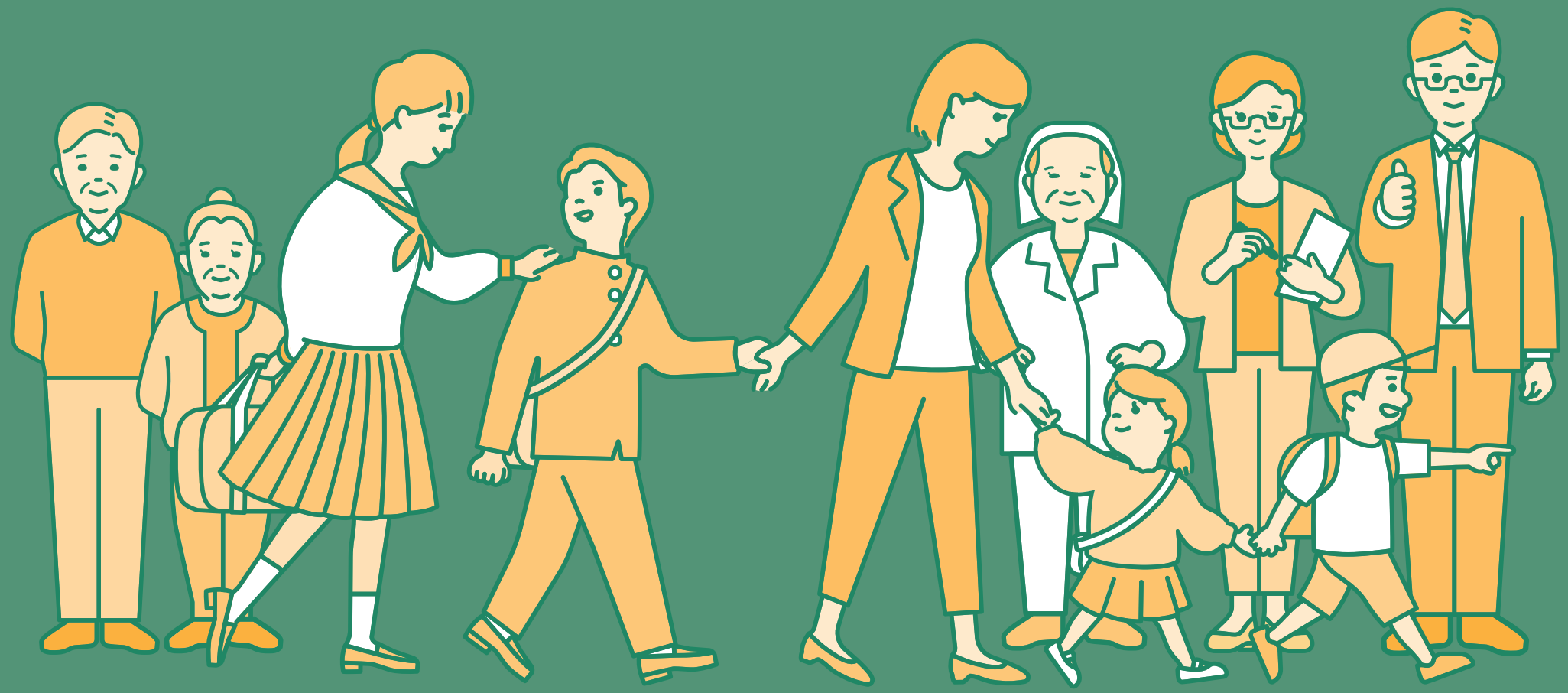
Learning for All

2021-2022



Learning for All 子どもの貧困に、本質的解決を。

特定非営利活動法人Learning for All
〒160-0022 東京都新宿区新宿五丁目1番1号 ローヤルマンションビル404号室
Tel：03-5357-7131　Mail：info@learningforall.or.jp

MISSION

子どもたちが苦しんでいます。
今この瞬間も、
経済的に比較的豊かと言われるこの国で、
私たちが思うより**遥かに多くの子どもたちが。**

貧困、虐待、発達障害、いじめ、
社会的マイノリティなど、
生きづらさを抱える子どもたち。
その現実をどうか知ってください。

「安心」を奪われている。
「努力を信じられる環境」を奪われている。
「自分自身の可能性に気づく機会」
を奪われている。

そこでは、**諦めが日常化してしまっています。**

2010年、学習支援からスタートした
私たちLearning for Allは、
現場の経験から、この問題を解決するには
「学び」を支えるだけでは足りないと
確信するに至りました。

現在では、
一人の子どもが自立するまで、
地域で連携して幅広くサポートできるモデルを構築。
全国へ広げるとともに、法・制度を変え、
子どものあらゆる「貧」と「困」をなくす社会を
つくろうとしています。

今目の前にいる子どもに、どこまでも寄り添うこと。
社会の仕組みそのものを、本気で変えていくこと。
そのどちらが欠けても未来はつくれない。

私たちは、志を同じくする
全ての人たちと力をひとつにし、
本質的解決を実現していきます。

子どもの貧困に、本質的解決を。

VALUES

Children First

—— 「子ども主語」で考えつづける

Change for All

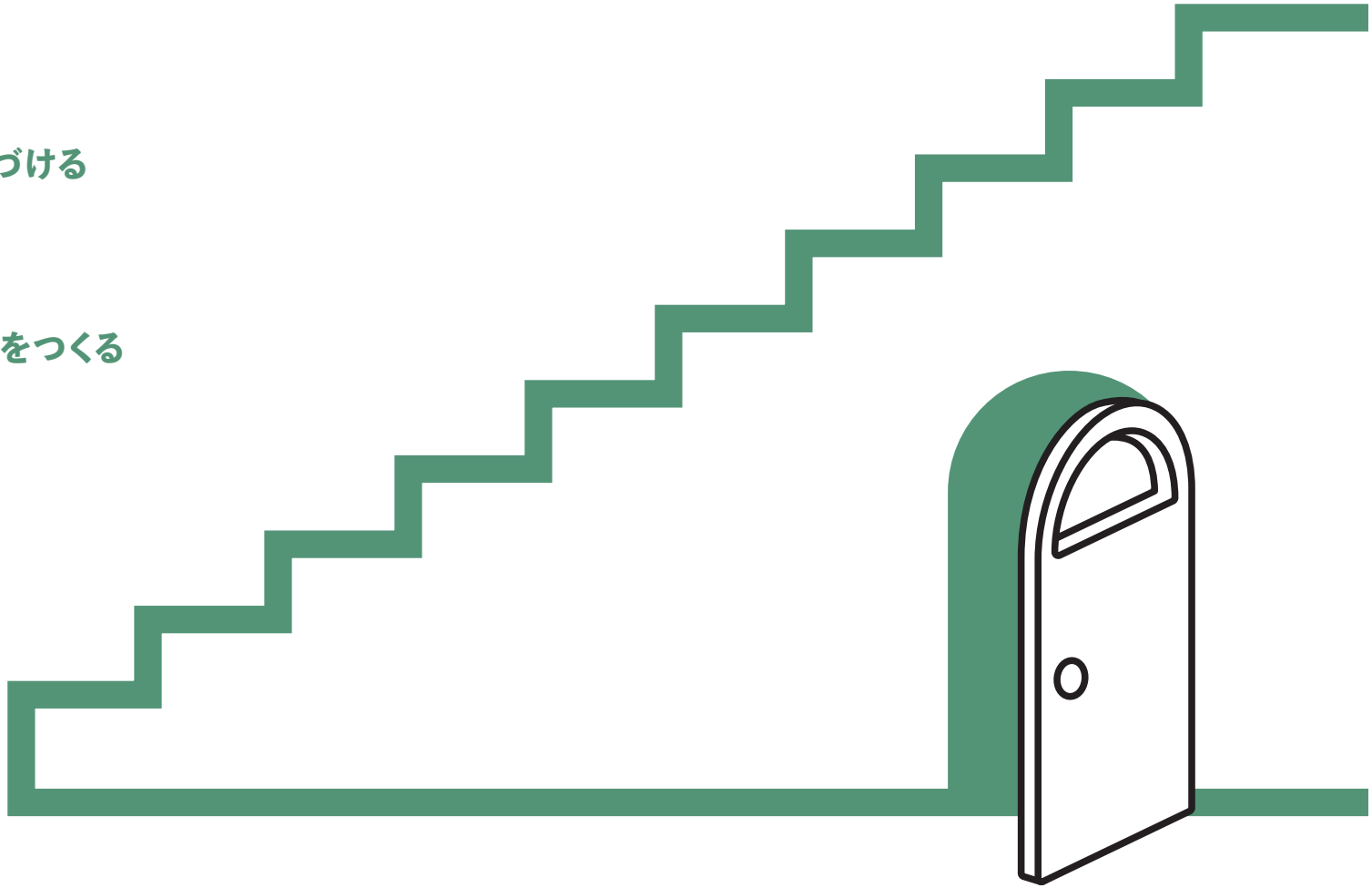
—— 本質的解決のために変わりつづける

Inspire for All

—— 関わる人ぜんぶに学びの機会をつくる

Collaborate for All

—— つながって、いっしょに創る



小学3年生のAくんは両親と6人のきょうだいと一緒に暮らしています。

両親とも病気がちで働いておらず、生活保護を受けて暮らしています。最近は特に体調が悪く、朝ごはんや晩ごはんを作ってもらえないこともあり、お腹を空かせたまま学校に行っています。

午前中の授業では集中して先生の話を聞くことが難しく、ぼーっとしている間に今何をしたらいいのかわからなくなってしまいます。その結果、授業を聞いていてもわからないことが増え、宿題も進まないことが増えてきました。

いつも明るく、友達も多いAくんはそれでも楽しく学校に通っています。ただ、最近は仲の良かった友達からお気に入りの服についてからかわれたり、きょうだいのことをバカにされることが増えてきました。

「何で毎日同じ服なんだよ。臭いんだよ!」「うちのお母さんがお前の兄ちゃんが昔捕まったって言ってたぞ」と言われて、つい怒ってしまい、喧嘩になることも何度もありました。

キーワード

#生活保護

#両親未就労

#多子世帯

#欠食あり

#ネグレクトの疑い

Bさんは16歳で、母親と中学1年生と小学3年生の弟の4人で暮らしています。母親は3人の子どもを養うために朝早くから夜遅くまで働いており、加えて、就学援助を受給しています。

定時制高校に進学したもののバイトと学校の両立が難しくなり、高校1年生の夏に中退。今は学校に通っていません。

高校に通いたい気持ちもありますが、中学生の時にいじめに遭った経験から、学校に通うこと自体への不安も同時にあります。

Bさんにとっての転機は中学生の頃でした。母親の就労条件が悪くなり、長時間労働を余儀なくされたことで、Bさんが弟たちの世話を担うようになっていきました。

家事に時間を取られることで部活を続けられなくなり、クラスで孤立することが増えたBさんは2年生の頃からいじめのターゲットになってしまい、その半年後には学校に行けなくなってしまいました。

当時、中学2年生の後半から、Bさんの家をスクールソーシャルワーカー（SSW）が訪ねるようになり、Bさんの相談に親身になって乗ってくれていましたが、中学を卒業するとSSWの訪問もなくなり、誰にも自分の悩みについて相談できない状態になってしまっていました。

キーワード

#ひとり親世帯

#親の精神疾患・体調不良

#発達障害疑い

#学力不振

#進路未決定

#ヤングケアラー

子どもたちの現状

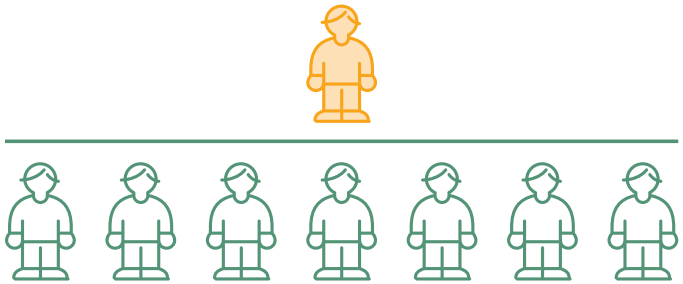
「今の日本で、本当に貧困が広がっているの？」
そんな疑問を耳にします。

私たちの活動を知っていただくには、
まず、問題を知っていただく必要があります。

日本の子どもたちは、あなたが思う以上に
経済的な困窮をはじめとする
様々な困難に直面しており、
それが原因で社会から疎外されてしまっています。

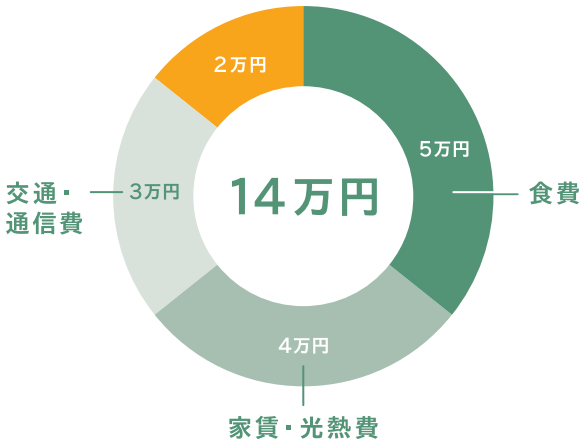
解決したい課題は、子どもの「貧困」

日本の子どもの7人に1人が「貧困」状態にあります。また、ひとり親世帯に限ると2人に1人が貧困状態にあり、これはG7の中では最悪の数字となっています。



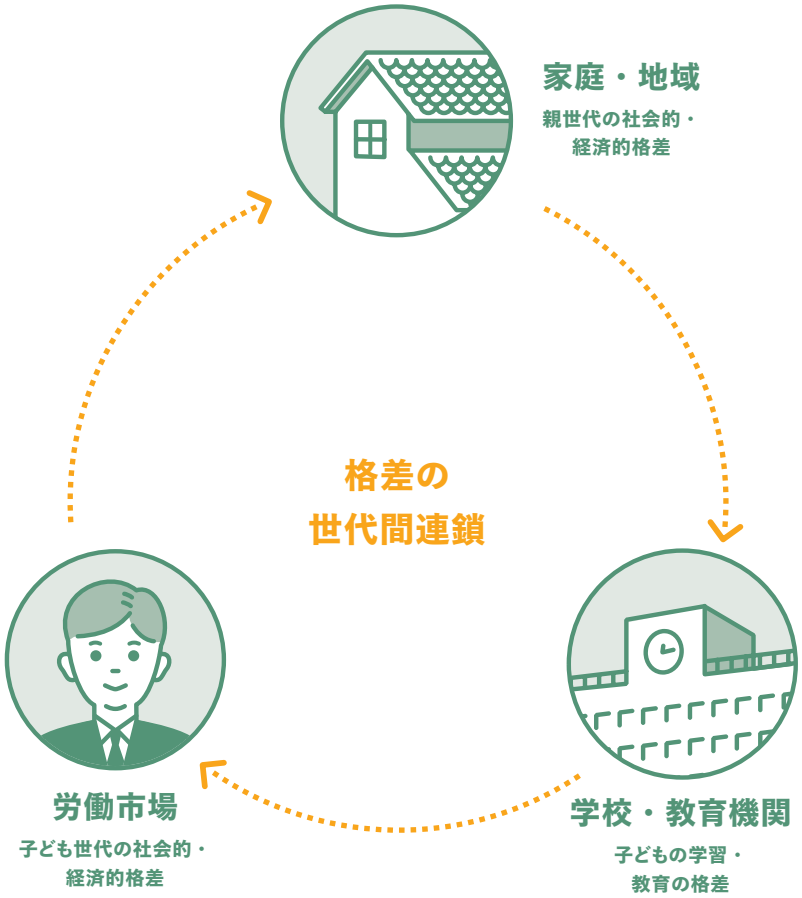
「子どもの貧困」の定義とは?

日本でいう「子どもの貧困」とは、相対的貧困のことを指し、その数は全国約260万人にものぼります。相対的貧困は、「年間の手取りの中央値の半分以下で暮らしている状態」と定義されています。これは例えば親子2人世帯（ひとり親世帯）の場合、年間約170万円、つまり1か月約14万円で暮らしている状態です。



「子どもの貧困」を放置すると…

子どもの貧困を放置すれば、格差の世代間連鎖を引き起こし、わずか1学年あたりでも経済損失は約2.9兆円、政府の財政負担は1.1兆円増加すると言われています。

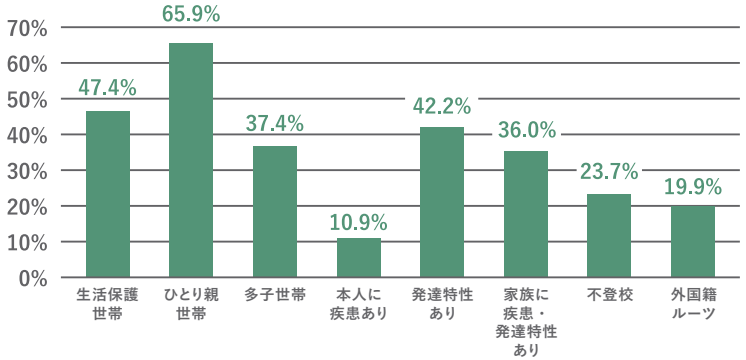


経済的な貧困だけが、問題なのですか？

私たちが向き合っている子どもたちの多くが、経済的な困難を抱えていますが、実際に子どもたちを苦しめているのは、お金がないことだけではありません。
冒頭でご紹介した子どもたちのように、一人の子どもが複数の困難な要因を抱えているケースが多く、これらが複雑に絡み合うことで、より生きづらい環境に置かれてしまっています。

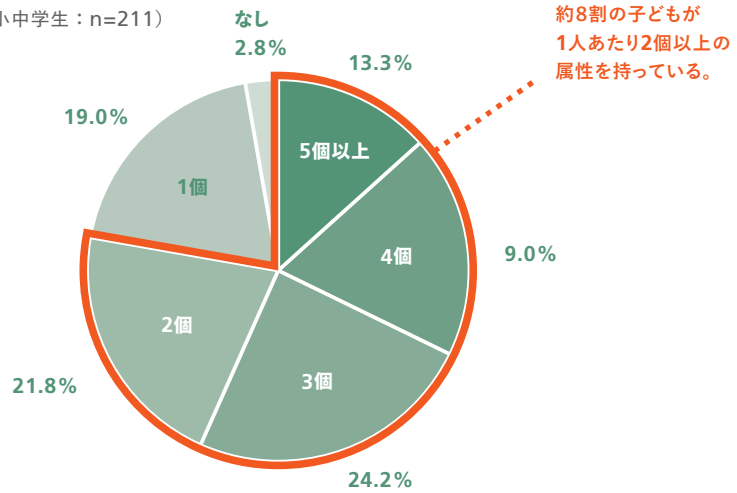
Learning for Allの支援に繋がった子ども属性

（小中学生：n=211）

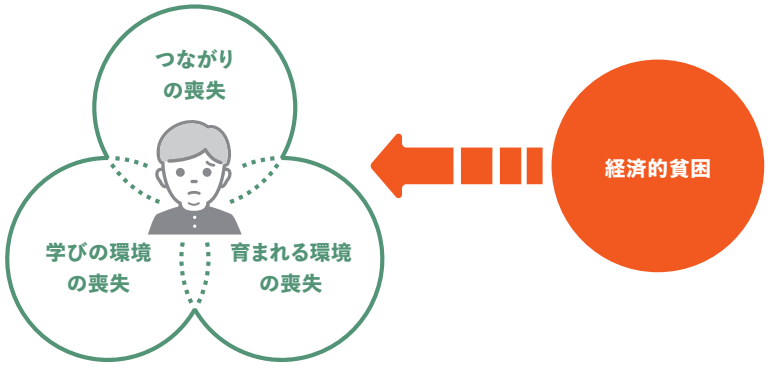


一人あたりの属性の数

（小中学生：n=211）



このように、経済的貧困を背景として、本来子どもたちの健やかな育ちに必須である「つながり」「学びの環境」「育まれる環境」を喪失しやすいということが、問題を複雑にし、自立を阻む大きな障壁となっています。



つながりの喪失

貧困・不登校・虐待などの様々な事情から、家庭や学校の中で安心できる居場所がない。不安なことやしんどいことを相談する相手もおらず、自分を支えてくれる友人や、NPO等の支援先とのつながりもないため、孤立してしまっている。

学びの環境の喪失

学校以外に学習する環境がなく、自分に適したペースと方法で学びを進めることができない。その結果、学習におけるつまずきを重ね、大きな学習の遅れを抱えてしまっている。さらに、自信も失い、自分の可能性を信じて将来の進路や夢を描くことができない状態に置かれてしまっている。

育まれる環境の喪失

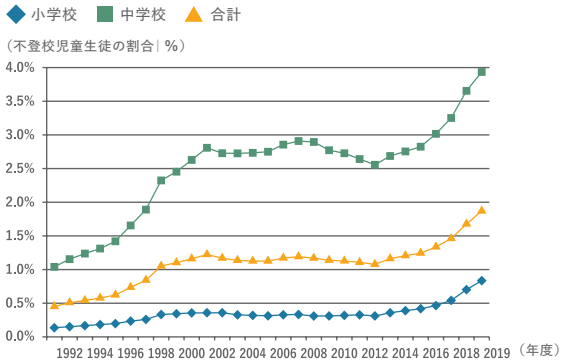
虐待を受けたり、不適切な養育環境に置かれたりしている。そのため、心地よい環境で適切なケアを受ける、基本的な生活習慣を身につける、めいっぱい遊ぶといった「当たり前」の機会が得られていない。こうした状況では心身を成長させることができず、学習以前の段階で様々な課題を抱えてしまっている。

数字で見る日本の子どもたちの現状

2012年以降、不登校率が上昇し続けています。

特に中学校での増加が顕著です。

小学校・中学校における不登校児童生徒の割合の推移

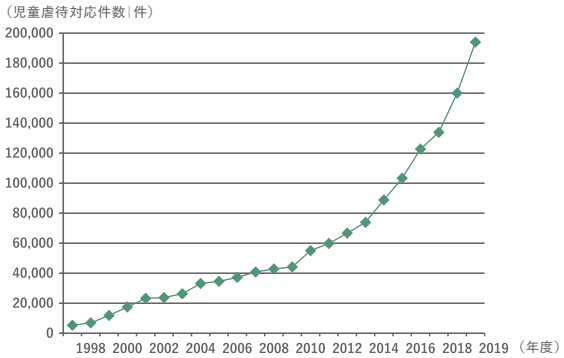


（出所）文部科学省「児童生徒の問題行動等生徒指導上に諸問題に関する調査」

児童虐待相談対応件数は、年間19万件以上。

特に2009年以降、右肩上がりに増加を続けています。

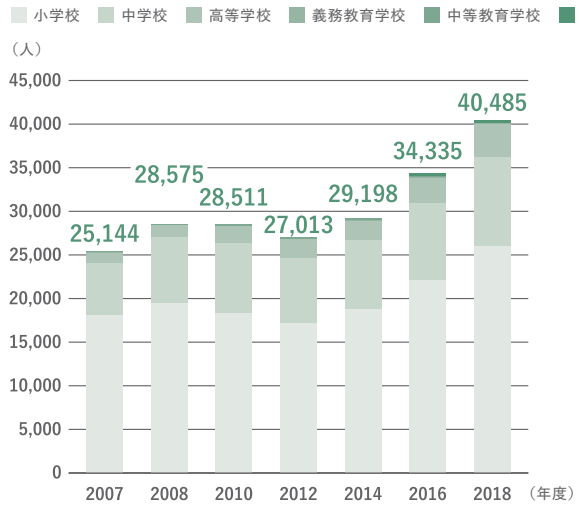
児童虐待の推移



（注1）2010年に関しては、福島県、宮城県を除いた数値となっている。
（注2）2019年の値は速報値であり、今後変更があり得る。
（出所）厚生労働省「福祉行政報告例」および、厚生労働省「令和元年度児童相談所での児童虐待相談対応件数〈速報値〉」

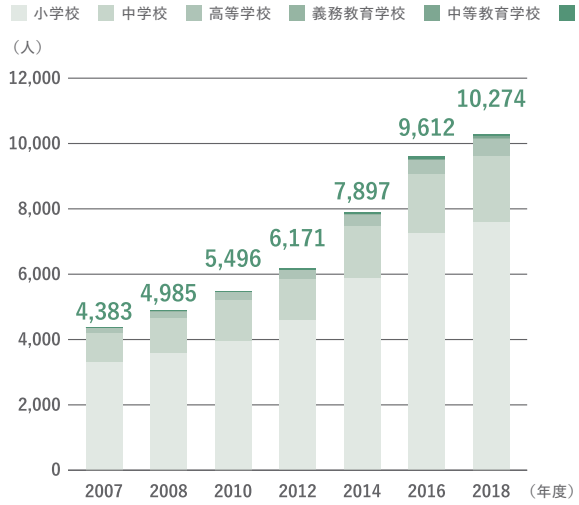
日本語指導が必要な外国籍の子どもも増え続けています。

公立学校における日本語指導が必要な外国籍の児童生徒数



（注）義務教育中は2016年度に創設された学校教育制度のため、2014年度以前のデータはない
（出所）文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」より作成

公立学校における日本語指導が必要な日本国籍の児童生徒数



（注）義務教育中は2016年度に創設された学校教育制度のため、2014年度以前のデータはない
（出所）文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」より作成

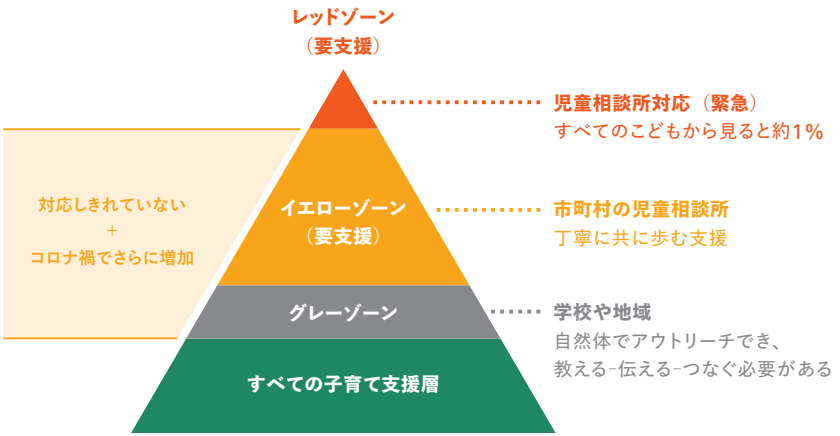
国や自治体・教育機関は、十分な支援を提供していないのですか？

困難を抱える子どもたちに対しては、「学校」「地域」「家庭」の様々な場面で、多様な主体がサポートを行っています。
しかし、支える大人側にも、直面している課題・困難があり、それゆえに、サポートの網目からこぼれ落ちてしまう子どもたちがいるというのが現状です。

例えば、就学援助対象の子ども数が約134万人（令和元年度）であるのに対して、実際に支援を受けている子どもたちは、年3万人程度にとどまります。※

また、特にリスクの高い“レッドゾーン”の子どもたちと、問題のない子の間に位置する“イエローゾーン”に多くの子どもたちが存在し、そのボリュームゾーンへの支援が特に足りていません。

※生活困窮者自立支援制度の「学習・生活支援事業」の受益者数（令和元年度）



※大阪府立大学　山野則子教授「学校・家庭・地域の教育力を機能させる仕組み作り～学校プラットドームの実現に向けて」を元に改変

子ども支援の担い手が抱える課題

実際に子どもたちを支援している大人たちにも、それぞれの立場で様々な制約があり、十分な支援の提供が難しい実態があります。

活動紹介

今、目の前にいる子どもに
どこまでも寄り添い、支え抜くこと。
一つの団体ではできない
大きなうねりを生み出し、
社会の構造そのものを変えていくこと。

その両方を実現しなければ
本当の意味で問題を
解決することはできません。

私たちは、現場のリアルな知見を
社会に広げていく3つのアプローチで、
子どもたちの未来をつくっています。

3つのアプローチ

1 一人に寄り添う

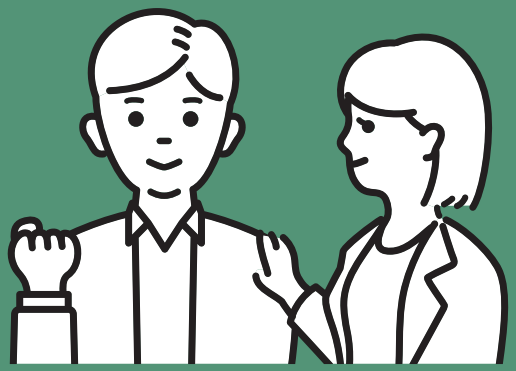
居場所づくり／学習支援
食事支援／保護者支援
コミュニティ連携

2 仕組みを広げる

ノウハウ展開／ノウハウ共有

3 社会を動かす

普及啓発／人材育成
政策提言



1. 一人に寄り添う

一人に寄り添う

地域のあらゆる立場の大人たちのネットワークをつくり、
支援の必要な子どもを見のがさず、早期につながる。
成長段階に合わせ、必要なサポートを6～18歳まで切れ目なく行う。
そんな「地域協働型子ども包括支援」を展開しています。

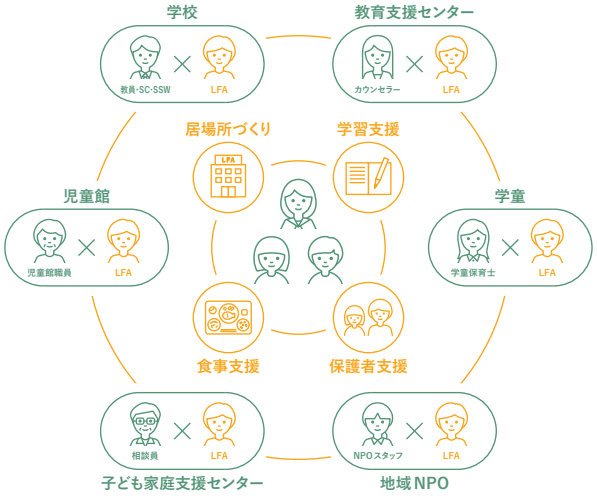
従来のタテ割り的な支援では、たとえば地域の一人の大人が
「この子、大丈夫かな」と問題に気づいても、その情報を地域全体で
共有できず、スピーディーかつ適切な支援が行えないことがありました。

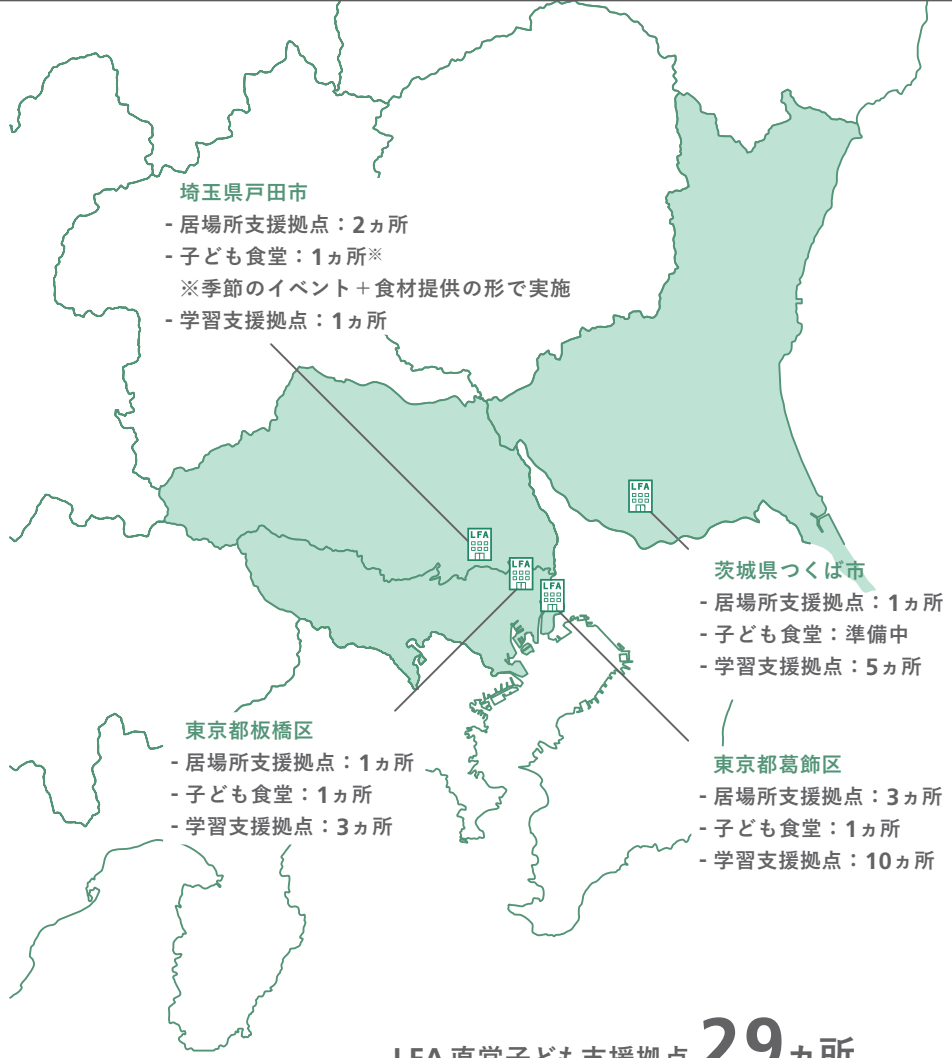
私たちLFAがすべての関係者・組織をつなぐことで、「見守る目」の
行き届かない子をなくし、一人ひとりに合わせた支援を早期から、
かつ自立できる年齢まで、継続的に提供し続けることができます。

地域の大人の
支援ネットワークづくり

×

子どもたちへの
包括的な支援提供





LFA直営子ども支援拠点 29ヵ所

都・県	市・区	居場所	子ども食堂	学習支援
東京都	葛飾区	3	1	10
	板橋区	1	1	3
埼玉県	戸田市	2	1※	1
茨城県	つくば市	1	（準備中）	5

※季節のイベント＋食材提供の形で実施

1. 一人に寄り添う

LFAの提供する支援メニュー

6〜18歳の子どもの状況に合わせ、
幅広い支援内容を
柔軟に展開しています。

子どもの貧困に、　本質的解決を。

Lear ning for All

居場所づくり（小学生）

対象｜小学校1年〜6年
生活習慣の学び直しや遊び・学習サポートとして**週5日**運営。保護者支援も同時に実施。

学習支援（学校内）

対象｜小学校4年〜中学校3年
学習遅滞の解消を目的とした1対3の担任制の指導。**週1回×3か月**のプログラムを年4回実施。

居場所づくり（中高生）

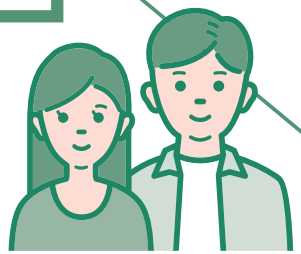
対象｜中学校1年〜高校3年
不登校や家庭・学校に居場所がない子どもを対象に**週3日**運営。

学習支援（公民館）

対象｜小学校4年〜中学校3年
不登校・日本語に難等、学校での個別対応が難しい子を対象に**週2回**の1対1の個別指導を実施。

食事支援

対象｜小学校1年〜高校3年
週5日の登録制子ども食堂。**月2回**は地域の大人・子どもも含めた食堂を開催。



保護者支援

対象｜保護者
日々の悩み相談だけでなく制度紹介・窓口への繋ぎ等も対応。繋がり作りとして保護者会等も実施。

1. 一人に寄り添う

居場所づくり事業

小学1年～高校3年生の子どもたちに、
安心して過ごせる居場所を提供する事業です。

複雑な家庭環境などにより人との接し方がわからない子、
発達障害を抱えている子、不登校やネット依存の子などに対し、
個別の子どもの課題や強み、保護者の方の状況に合わせた
個別の支援計画を立て、一人ひとりに寄り添った支援をおこなっています。

拠点に来られない子どもたちの家庭への「訪問支援」や、
中高生の「就労支援」など、新しい取り組みにもチャレンジしています。

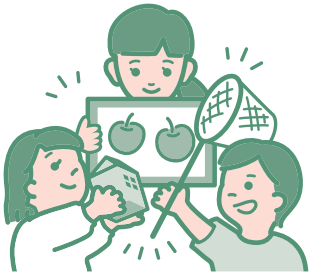
居場所づくり（小学生）
対象｜小学校1年～6年
生活習慣の学び直しや遊び・学習サポートとして週5日運営。保護者支援も同時に実施。

居場所づくり（中高生）
対象｜中学校1年～高校3年
不登校や家庭・学校に居場所がない子どもを対象に週3日運営。

Learning for Allの居場所づくりの特徴

健やかに育つ基盤づくり

小学生の子どもたちには、手洗い・うがいや歯磨きといった基礎的な生活習慣を身につける支援、宿題の見守りなどによる学習のサポート、栄養バランスの整った夕食の提供、最大20時までの預かりをしています。

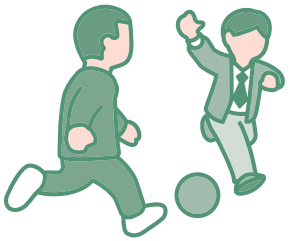


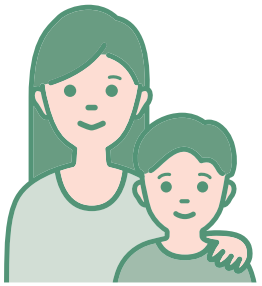
一人ひとりの魅力が輝くサポート

それぞれの子どもにある課題や特性にあわせて支援計画を作り、それぞれの強みを活かす支援を行っています。子どもたちの自己肯定感を高めるために、彼らが制作した作品の展示やプリントのファイリング、素敵なアクションを褒めるカードを送るなど、子どもたちの強みを可視化しています。

多様性を認め合える仲間づくり

専門性・経験豊富な常勤スタッフが、子どもたちの感情に寄り添い一緒に考えながら、様々な困難を抱える子どもたちがお互いの良さを認め合えるような働きかけをしています。

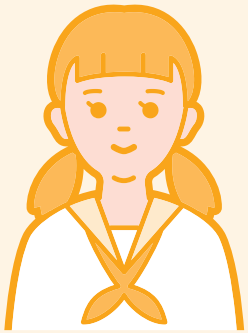




子どもと家庭をまるごとサポート

拠点に居る時間だけではなく、家庭に居る時間にも目を向けた支援を行っています。支援計画ではそれぞれの子どもが抱える背景にも踏み込み、生活全体の課題が解決されるように取り組んでいます。保護者との日々のコミュニケーションを通じて信頼関係を築き、家庭も含めた総合的なサポートをしています。

子どもたちの変化



高校生
Bさん

長年不登校が続いている、高校生のBさん。
過去に学校の先生から心無い言葉を投げかけられたことをきっかけに、大人への不信感を持っていました。
大人と関わることへの抵抗からか、常に自分を大きく見せるような発言や態度が見られ、頻繁に小さな嘘をつくことも。
大人と距離を取るようなコミュニケーションが多かったBさんですが、居場所拠点で1年間、LFAスタッフの裏表のないコミュニケーションに触れる中で、徐々に態度がやわらかくなっていきました。
次第に表情もおだやかになり、スタッフとのコミュニケーションでも、素直な自分を見せられるように。
今では拠点を自分の“居場所”として捉え、拠点がさらに良くなるようなアイデアを考えて提案したり、自らスタッフの手伝いをしてくれるようになりました。

1. 一人に寄り添う

学習支援事業

小学校4年～高校3年生の子どもたちを対象に、
地域や学校と協力して無償の「学習支援拠点」を設置しています。
質の高さと継続性に徹底的にこだわり、
独自の研修を受けた大学生ボランティアが教師となって、
学習遅滞を抱えた子どもたちに寄り添って勉強を教えています。
生徒の学習進度や家庭環境に合わせ、
彼らが進学を諦めなくていいように、
時には日々の生活習慣にまで踏み込んだ指導を行っています。

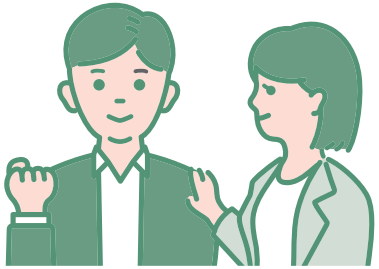
学習支援（学校内）
対象｜小学校4年～中学校3年
学習遅滞の解消を目的とした1対3の担任制の指導。週1回×3か月のプログラムを年4回実施。

学習支援（公民館）
対象｜小学校4年～中学校3年
不登校・日本語に難等、学校での個別対応が難しい子を対象に週2回の1対1の個別指導を実施。

Learning for Allの学習支援の特徴

学習の「質」へのこだわり

大学生のボランティア教師はLFA独自開発の量・質ともに充実した研修（約40時間以上）を必須受講。フィードバックにあたるスタッフを配置し、指導の振り返りを徹底することにより常に授業のやり方や教材を改善。教師1人に対して生徒1～3人の、一人ひとりに寄り添った個別指導を展開しています。



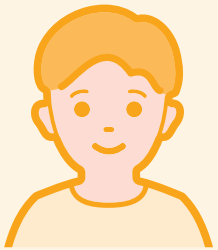
確実に成果を出すために

生徒が確実に学習で成果を出せるよう、プログラム中は同じ教師と生徒たちで行い、3か月を区切りとした継続的なプログラムを提供しています。信頼した教師と安心できる学習環境は、生徒の確実な学習効果に繋がります。
※夏は短期集中プログラム（5～7日間）

一人ひとりに合わせた教材を使用

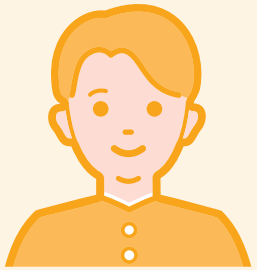
大学生教師の研修の様子

子どもたちの変化



小学校6年生
Mくん

外国にルーツを持つ小学6年生のMくん。
将来を見据えて予習・復習に日々励むこと、自分の意思を言語化することなどは習慣として身についていましたが、早く計算することに重きを置いてしまい、ケアレスミスをしてしまったり、「自分は頑張っていない」「バカだ」というネガティブな発言も少なくありませんでした。
まず、担当のボランティア教師はケアレスミスを減らすために見直しの重要性を伝え、筆算の位をそろえて計算してもらうように。
ネガティブな発言に対しては、「いつも授業も集中して聞いてくれているし、予習・復習も欠かさずやっていて頑張っているから、自信をもって」という声掛けを意識的に行うようにしました。
その結果、Mくんは自分で間違いに気づけるようになり、ネガティブな発言も、当初に比べるとさほど見られなくなりました。



中学3年生
Tくん

小学3年生から不登校だった中学3年生のTくん。
Tくんは、自分の思いや考えを言葉にすることがあまり得意ではありませんでした。
何か質問を投げかけても首を傾げて黙ったままだったり、「わかんない」という返事が返ってくることもしばしば。
担当のボランティア教師は、Tくんに多くの選択肢の中から将来自分のやりたいことを選択してほしいと思っており、高校進学を考えているTくんに対し、進学するための学力はもちろんのこと、高校生活を楽しむために、友人関係を築くコミュニケーション能力を高める必要があると考えました。
そこでボランティア教師は、Tくんの趣味である自転車について調べてきてもらい、その内容を新聞形式でまとめ、話してもらう機会を設けました。するとTくんはイキイキとした様子で様々なことを話し、質問に対しても臆することなく返答してくれました。
その後、授業を重ねていくうちに「先生これ見て!」などの発言も増え、Tくんからのコミュニケーションが増えました。

1. 一人に寄り添う

食事支援

子どもたちの健やかな育ちには、栄養のある食事がかかせません。
経済的に困難を抱えていたり、仕事で忙しい保護者の方に代わり、
子ども食堂の他、フードパントリーや食料品の配送まで、
様々な方法で子どもたちの「食」を支援しています。

子ども食堂

小学校1年～高校3年の子どもたちに、
登録制で週5日の食事を提供。
月2回は地域の大人・子どもを含めた
食堂を開催しています。

フードパントリー

LFA の支援拠点で野菜などの食料を
並べ、無償配布する活動です。
コロナ禍の緊急支援からはじめた活動
を、今も継続して行っています。

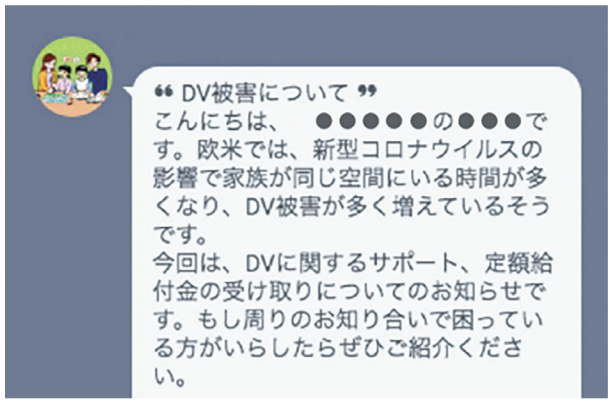
食料品・物資の提供

経済的に厳しい状況に置かれた保護
者の方からの声に応え、家庭に必要な
食料品や生活物質を、直接配送してい
ます。

1. 一人に寄り添う

保護者支援

子どもたちを支えるためには、保護者の方のサポートも大切です。
LINE やメール、電話、対面と様々な手段を活用し、
日々の悩み相談だけでなく、支援制度の紹介・窓口への繋ぎ等も対応。
保護者様同士の繋がりづくりとして、保護者会等も実施しています。



現場より

宇地原栄斗

子ども支援事業部
マネージャー

沖縄県生まれ。2015年、東京大学文科三類入学。2016年、LFAのボランティア教師になる。2019年、東京大学教育学部卒業、LFAに入職。

私たちが向き合っている子どもたちの特徴

“子どもたちはひとりひとり、前向きな気持ちやいいところを持っている。それが発揮できない環境にいるだけ”

大前提として、子どもたちはひとりひとり、抱えている課題も性格も、全く違う個性を持っています。経済的に困難な世帯に暮らしているからといって、画一的な特徴がある訳ではありません。ただ、ゆるやかな共通点としては、既存の学校や制度の中では生きづらい環境に置かれているということですね。

例えば、お父さんが事故で亡くなって、小4から中3まで不登校だった子がいて。出会った頃は中1で、学校の勉強はかなり遅れてしまっていたので、九九から一緒に勉強したんですけど…そこだけ見てしまうと、“勉強のできない子”ですよね。でも、実は強い知的好奇心を持っていて、授業中もたくさん質問してくれるんです。

絵も上手で、自分で画集を作っていました。気持ちが勉強に向かない時は僕も一緒にお絵描きをするなど、寄り添って見守っていました。「良かったら（画集を）見てみたいな」と伝えたところ、ある時画集を持ってきて、僕にも見せてくれて。すごく恥ずかしがってましたけどね（笑）

子どもたちはひとりひとり、すごく前向きでいいところを持っているんです。でもそれを、出しづらい環境にいる。例えば彼女も、一度学校に復帰しかけた時に、先生にわからないところを質問しに行ったら、「わからなければ答えを写して提出すればいい」と言われてしまった。せっかく前向きに学校の勉強に取り組もうとしていたのに、本人も「それじゃ勉強できるようにならないし、意味ないと思う」と話していて。結果、それだけが原因ではないかもしれないけれど、また学校には行けなくなってしまった。幸いその子は、LFAの拠点で過ごして、高校に無事進学して、学校にも行けるようになって。今は心配していない状況なんですけどね。信頼できる大人が周りにいる、安心できるということが、子どもたちにとってすごく大切だと、その時に強く感じました。

強く印象に残っている、子どもの成長エピソード

“卒業式の日、突然先生たちを座らせて、その子は語り始めた”

今はもう社会人なんですけど、僕がボランティア教師として出会った時には、中2だった女の子がいて。その子は学校でいじめにあっていて、不登校気味。少し大人びていて同じくらいの年齢の子と喋るのが、得意ではなかった。慣れた大人や、ゆっくり耳を傾けてくれる大人でないと喋れなかったんです。

本人はすごく読書家で、LFAの拠点で仲の良い一部の先生とは、好きな本の話をたくさんしてくれたんですけど…やっぱり、初対面の先生や他の子どもたちとは目を合わせて喋れなくて。慣れている先生の方ばっかり見て話すのが普通でした。勉強にも前向きではなくて、高校進学はどうするんだろうと心配していました。進学自体もですが、何より将来社会に出たときに、自分の考えていることや、周りにしてほしい事を伝えられる大人になれるか、そこが心配でしたね。

でも、それを直接口で言って、指図をしてもダメなんです。子どもたち自身が、変わりたい、挑戦したい、っていう

気持ちにならないと。子どもたちはみんなそうした前向きな気持ちを持っているんですけど、安心して過ごせる場所や、信頼できる大人が周りにいないと、その段階にいけないんですね。だから僕らは、やきもきすることもあるけれど、子どもたち自身が納得して自分のペースで踏み出せるタイミングを見守って待つということをしています。

その子のことも、ずっと見守っていて。中3になって、いよいよ高校進学について話さないといけないという時になって、その子の口からはじめて、「高校には行きたい。高校では、新しい友達もつくりたい。自分の考えも、みんなに伝えられるようになりたい」という言葉が出たんです。それまで特に、僕らの方から具体的にそうした話をしたことはなかったんですけど、元々そういう気持ちを持っていたんでしょうね。本人としては苦手なことだし、向き合うことに勇気のいることだったと思うんですが、それを口にして周りの大人に伝えられたことが大きな一歩だったと感じています。

結果、彼女はすごく頑張って、高校に無事進学。LFAの拠点に通う最後の日に、LFAの教師たちから子どもたちに寄せ書きを渡して最後の授業を終えたのですが…少ししたら拠点にふらっと戻ってきて。

突然、「先生たちに言いたいことがある」って言って、僕らをその場に座らせて。前に立って、語り始めたんです。「私はコミュ障で、●●●（拠点名）に来た時も話せなかったし、仲の良い先生たちとしか話せなかった。でも、先生たちがずっと優しくしてくれたので話せるようになったし、勉強もできるようになった。自分の気持ちも、こうして伝えられるようになって、自分でも驚いている」と…そんな話をしてくれました。それはすごく、嬉しかったですね。

LFAが実践している「地域協働型子ども包括支援」という支援モデルでは、”切れ目のない支援”が大事だということをお話しているんですけど、それはやっぱり、子どもたちの成長を見守り支えるプロセスには、時間がかかるからなんです。拠点に来て、1〜2年経って、やっと子どもたちの気持ちが安定して、前向きに挑戦したいという気持ちが出てくる。

心が健やかになると、未来のことを考えられるようになる。そういう子どもたちを、たくさん見てきました。

うまくいかなかったこと、もっとこうしてあげたかったという出来事

もちろんあります。一度拠点に来てくれたけど、その後来れなくなってしまった子や、情報を得ていたけれど繋がれなかった子のことは、その後もずっと心のどこかで気になっていますね。

例えば、発達に遅れのある中1の男の子がいて。中学にあがってすぐ、不登校になってしまった。ご家庭も大変でした。お母さんはひとり親で、生活保護を受けながら一生懸命働いて、とても疲弊していました。兄弟がいたんですけど、お姉さんにも障がいがあって…将来のことを巡って、お母さんと激しく衝突している状況。お母さんも、どうしていいかわからないという状況で、面談のたびに涙を流していました。

なんとかできることを探したんですけど、男の子本人が、拠点に来れなくなってしまい…知らない人がたくさんいる環境に、馴染めなかったようです。何もできなかったという感覚が、今でもずっと残っています。あの子たちを支えられるためには何ができてたらいいのかという問いが、現場のあり方を考える自分の核になっています。

“何もできなかったという気持ちが、原動力に”

拠点に来れない子のために家庭を訪問するタイプの「訪問支援」を立ち上げたのも、その経験からです。2週に1度、そうした子どもたちの家庭を訪問しています。周りの大人が信用できず引

きこもり気味になってしまっている子どもたちと、何気ないおしゃべりをしたり、一緒に遊んだり。その子が将来社会に参加したり、一歩外に出るところを伴走したいという思いがあります。

保護者の方の言葉で、嬉しかったこと

山ほどありますね…。どの保護者さんも口を揃えて言ってくださるのは、「他人なのに、自分の子どものことをここまで真剣に考えて、一緒に悩んでくれることが嬉しい」ということですね。

保護者の方も、孤立しているんです。外国籍で日本語がわからなかったり、ひとり親でお仕事を頑張っている方は、信頼して話せる相手がいるだけて嬉しいと思ってくださっている。

学校に馴染めなかったり、勉強についていけなくて泣いている子どもたちを見て、保護者の方も傷ついているし、どうしてあげればいいかわからないと悩んでいます。支援の制度があっても、利用の仕方がわからなかったり、忙しくて学校側とコンタクトを取れないので、情報にキャッチアップできずにいる。僕らはそんな保護者の方に受験の制度をお伝えしたり、一緒に支援の書類に記入したり、区役所の生活保護担当のケースワーカーさんに繋げたりと、寄り添った支援を続けています。

コロナ禍のインパクトや、団体としての変化について

元々コロナがなくても、子どもたちは大変な状況にはいたので、ある意味子どもたちの日常を守るという点においては変わらない部分もあります。前向きに捉えれば、改めて「子どもたちにとって本当に必要な支援はなんなのか?」を問い直す、良いきっかけになりました。

コロナ禍でも、多くの人に支えられて、LFAはすごく支援の幅を拡げることができました。他の子ども支援団体様へのナレッジ共有が進んだり、拠点の数も増えました。一方で、やることが増えると当然、必要なリソースが増えていく。自分たちだけでやろうとするのではなくて、地域の方々や、企業の方…色々な方の力をお借りしていくことが益々大事になっていると感じています。

メディアで取り上げていただくことで、「何かできることはないか」とお問い合わせをしてくださる企業様も増えていて、大変ありがたいです。

団体の活動や現場が拡大していく一方で、地域の中でLFAの存在感だけが異様に高まっていくというのは、実はあまり良いことではないと思っています。LFAありきではなくて、周りの方々と一緒に成長していけるような形を作っていきたい。葛飾の居場所拠点では、地域のボランティアさんが夕食を作りに来てくれています。地域の方ならではの視点で、心配なお子さんを紹介していただいたり、虐待の疑いに対して、一緒に対応をしたり。そうした連携が、出来はじめているのは良いことだなと。

コロナによって経済的に影響を受けた家庭への食糧支援としてはじめた「フードパントリー」の取り組みも、地域の方々との良い交流の場になっています。そうした地域と繋がれる場を活かして、子どもたちの「社会参加のきっかけ作り」にも取り組んでいます。具体的にはフードパントリーの準備・運営を子どもたちと一緒に行っているのですが、そこでの経験がとても自信に繋がっているようで、小学校から不登校だった高校2年の女の子が、「(初めて会う人たちと一緒に) こんなことが出来るなら、アルバイトもはじめてみようかな」と口にしたり。子どもたちの地域参加、社会参加を促す「就労支援」は、これからもどんどんプログラム化を進めていきたいですね。

現場より、支援をしてくださる皆様へ

“子どもたちにとって、本当に意味ある関わり方が出来ている自負があります”

“サポーターの皆様がいなければ、何もない。どうかこれからも、一緒に拠点を作ってほしい”

自分たちで言うのも…というところもありますが、日々子どもたちと接する中で、本当に彼らにとって意味のある関わり方が出来ているという自負があります。

そしてこれからも常に子どもたちの声を聞いて、現状に満足するのではなく、よりよい形を作り続ける組織でありたいと思っています。

でもそれは勿論、そうした活動ができる拠点があり、関わってくださる皆さんがいて、いただくお金があって、はじめて成立することなんですよね。

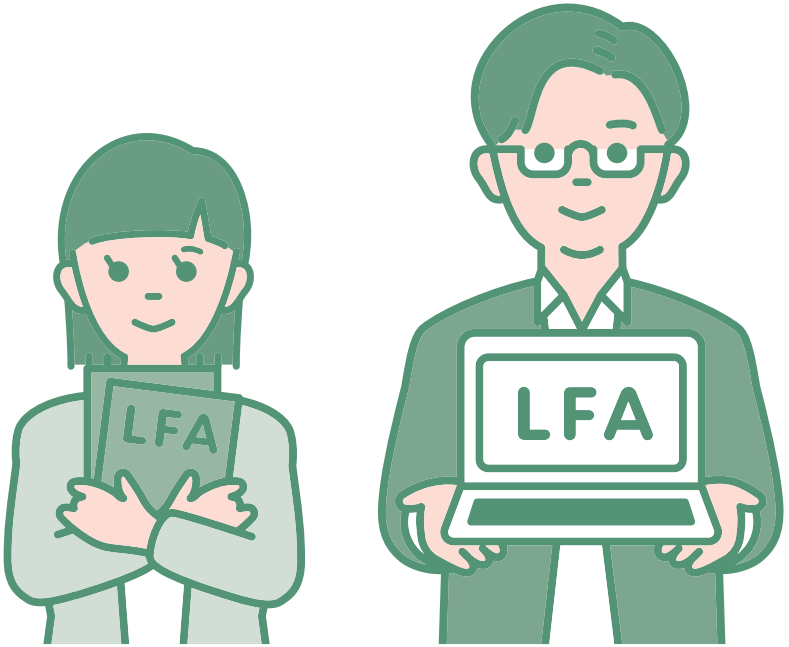
サポーターの皆様と一緒に作ってきた現場であり、支援だと思っています。なのでこれからも是非子どもたちのために、僕らと一緒に、子どもたちが安心して育まれる拠点を作る仲間でいてください。

2. 仕組みを広げる

仕組みを広げる

「地域協働型子ども包括支援」の全国展開

現在の日本では、子ども支援に関わる人・団体の努力にもかかわらず、
支援の「量」「質」ともにまだ足りていないのが現実です。
LFAでは、これまで培ってきた実践的な支援のノウハウを
全国の子ども支援団体や企業に提供。
日本中の子ども支援者がつながるネットワークづくりにも
取り組むことで、「地域協働型子ども包括支援」の
全国展開を推進しています。



ノウハウ展開事業

LFAが子どもたちと向き合う中で
蓄積してきた知識や経験を、
全国の同じように「子どもの貧困」
の解決に取り組む団体や企業に
ご提供しています。

支援ノウハウ提供先
団体・企業 **36**ヵ所
（全国16都道府県）

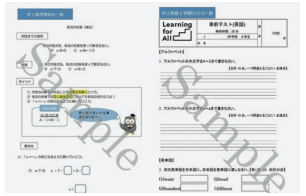
「LFA e-learning」「テスト・教材」「集合研修」の3つのサービスを提供しています。

LFA e-Learning

動画教材を使って、子ども支援を行うために必要な研修をオンラインで受けられるサービスです。

テスト・教材DL

市販の教材では対応が難しいお子さん向けに、LFAオリジナルのスモールステップ教材をご提供します。



集合研修

子どもとのコミュニケーション方法から組織運営まで、各団体様のニーズに合わせた研修をご提供しています。

無料で研修動画などを一部ご覧いただけます。
詳しくはLFA公式サイトをご覧くださいませ。

2. 仕組みを広げる

全国の子ども支援者とのノウハウ共有プラットフォーム

子どもたちの抱えている複雑な課題に対し、
一つの専門性だけで対応できないのが「子ども支援」。
LFAでは、全国の子ども支援者がノウハウを共有し、
支え合えるオンラインプラットフォーム「こども支援ナビ」を開設。
子ども支援者の方々の役に立つ事例や記事を発信しながら、
支援者同士のネットワークづくりにも役立てています。

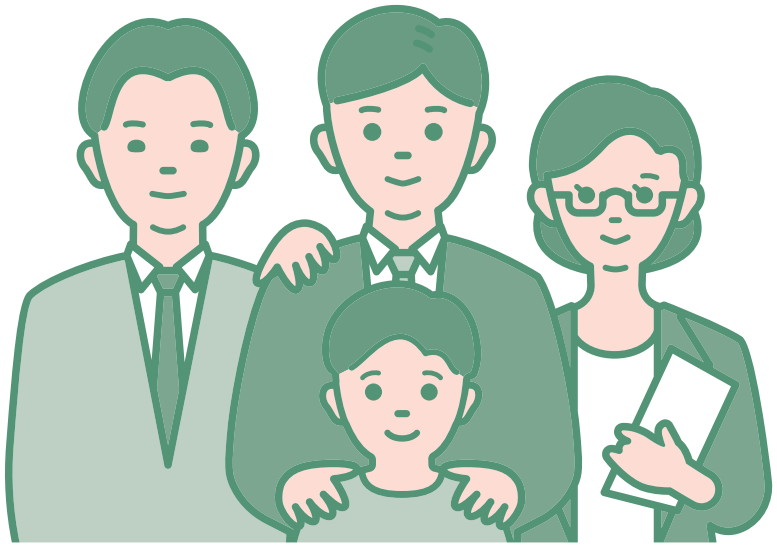
みんなでシェアしよう、現場のノウハウ！
こども支援ナビ
Connect for children in need

こども支援ナビへは
下記QRコードより
アクセスできます。

ゴールドマン・サックス 地域協働型子ども包括支援基金

地域で子ども包括支援を実践する団体を、
資金面をはじめとして、研修や伴走支援などの
非資金的な面でもサポートをする助成プログラムです。
LFAがこれまで進めてきた「地域協働型子ども包括支援」を広め、
全国の子どもたちを支える実践者の応援を行っていきたいと思い、
ゴールドマン・サックス様、パブリックリソース財団様の
ご協力を得て発足。2021年度から3年間で17団体へ
総額1.2億円※の資金援助を進めています。

ゴールドマン・サックス
地域協働型
子ども包括支援基金



※助成金額は支援団体数によって変動する可能性があります。

3. 社会を動かす

社会を動かす

子どもたちを取り巻く社会構造そのものを変えるために

目の前の子どもにどこまでも寄り添う。
その重要さは疑う余地がない一方で、
問題を真に解決するためには世論の形成や、
社会の仕組みを変えていく必要があります。
LFAは現場での支援活動や、
全国の子ども支援団体とのネットワークづくりを通して、
課題の普及啓発・人材育成・政策提言に取り組んでいます。

課題の普及啓発

まだまだ知られていない、「子どもの貧困」の現状。
メディアからの取材に応じるだけでなく、
対面で直接、説明する機会を積極的に設けています。

メディアでの発信

TVや新聞、ネットニュースなど媒体を問わず、代表自ら出演し、課題啓発を行っています。

企業での研修

企業CSR活動の一環として、「子どもの貧困」の社会課題を学び、ともに解決策を考える社内研修を販売しています。

社会人向け活動説明会

寄付者の方や、「子どもの貧困」にご興味のある社会人の方に向けて、LFAの活動説明会を定期的に行っています。

3. 社会を動かす

政策提言

全国の子ども支援団体と手を取り合って、「子どもの貧困」を
解決するための調査報告や政策提言を行っています。

調査報告書の公開

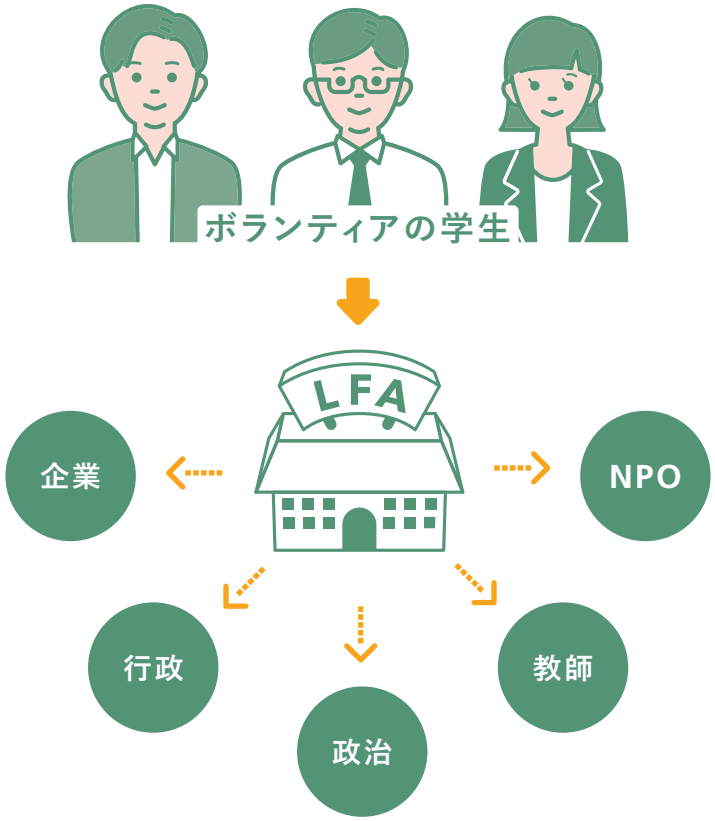
統一指標をもとに、子ども・保護者・支援団体の状況等を調査。調査結果を世の中に発信しています。

国や自治体への政策提言

調査結果や現場の子どもたちの声をもとに、国や自治体への政策提言を行っています。

社会を変えるリーダー人材の育成

LFAは、学生ボランティアの受け入れを通して、
社会を変えるリーダー人材の育成を行っています。
目の前の子どもたちと真剣に向き合う経験をしたOB・OGたちは、
卒業後もLFAのアルムナイネットワークで繋がり、
それぞれの道に進んだ後も、それぞれのアプローチで
「子どもの貧困」の解決に取り組んでいます。



活動の成果

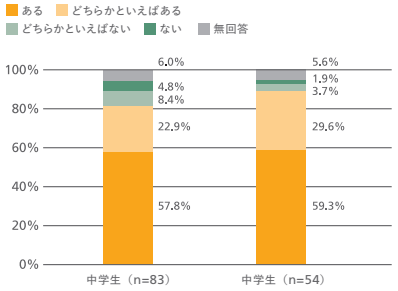
子どもたちの抱えている課題は複雑で、
すぐに全てが解決できる訳ではありません。

そんな中でも、
日々の活動の中で見えてくる
支援の成果の一部をご紹介します。

子どもたちの変化

80%以上の子どもが、LFAに通うようになって、できることや成長したことがあると回答しています。

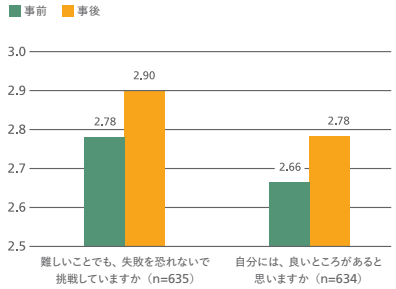
LFAの拠点に通うようになって、できるようになったことや成長したことはありますか？



（出所）子どもアンケート（2020年8月実施調査）

失敗を恐れずに挑戦している、自分に良いところがあると思える子どもの数が、増えています。

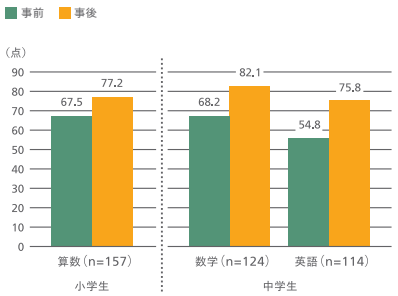
失敗を恐れずに挑戦している、自分には良いところがあると思う（中学生）



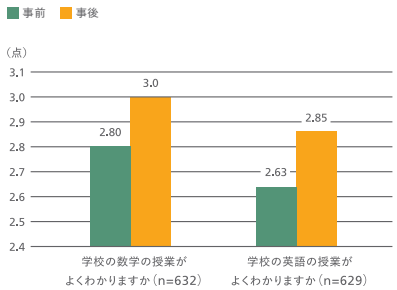
（注）4段階の回答のうち、「あてはまる」を4、「あてはまらない」を1などとしたうえで平均を取った値。2018年以前に収集したアンケートの結果を含む。事前と事後の差は、いずれも統計的に有意。（出所）学習支援アンケート

学校の授業がよくわかるようになり、学力テストでも平均10点以上の伸びが見られます。

学力テストの特典（小学生・中学生）



学校の授業がよくわかる（中学生）



左図 ｜（出所）学力テスト
右図 ｜（注）4段階の回答のうち、「あてはまる」を4、「あてはまらない」を1などとしたうえで平均を取った値。
CES拠点以外で収集したアンケートの結果を含む。事前と事後の差は、いずれも統計的に有意。（出所）学習支援アンケート

子どもたちの声

いつもありがとうございます。わたしはLFAのおかげでいまは日本ごがいえたりかいたりできるようになりました。ほんとにありがとうございます。これからもよろしく!!

先生たちがこんなに熱心にかかわってくれるのに、自分ががんばらなくてどうするんだ！と思った。大学生になったら、LFAで教師をやりたい。

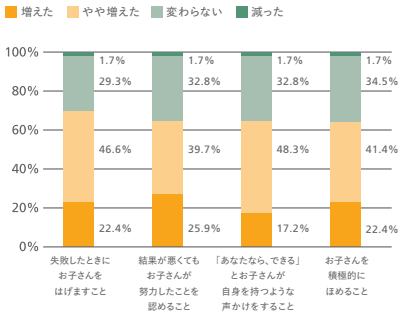
Learning for Allは自分みたいに不登校の子たちに来てほしい。その子たちの強み、暗記力とかの特技を伸ばす場所であってほしい。

保護者の方の変化

60%以上の保護者の方が、「失敗したときにお子さんをはげますこと」や、「結果が悪くてもお子さんを努力したことを認めること」が増えたと答えています。

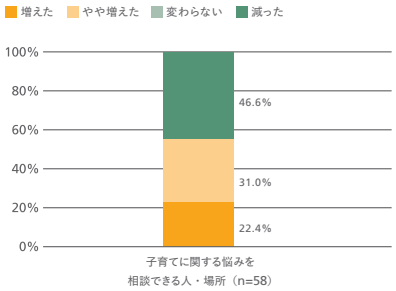
50%以上の保護者の方が、子育てに関して相談できる相手が増えたと回答しています。

子どもの接し方について（保護者）



（出所）保護者向けアンケート

子どもの接し方について（保護者）



（出所）保護者向けアンケート

保護者の声

今まで相談する場が少なく、ママ友さんも皆様年上の方ばかり、子どもが安心して遊べる場所もありませんでした。（LFAの支援拠点名）の皆様、子どもたちに出会い、私自身又娘も集団の中で、自分のペースに合った取り組みに、とても満足しています。

学校以外での勉強のフォローは、もちろん家庭でも行っていますが、（LFAの支援拠点名）でサポートがあることで負担感が和らぎます。また、通常の塾に行かせるには色々な面でハードルが高く、保護者としてとても助かります。

地域の変化

「地域協働型子ども包括支援」の導入によって、地域の子ども支援者の方々が、互いに連携しやすくなったと答えています。

民生児童委員

かつては学校との情報共有は密でしたが、だんだんと個人情報の取扱などの問題から、学校と情報を共有することが難しくなっていました。そうした中で、学校内で学習支援活動を行っていたLFAと出会ったこと、また校長先生の尽力のおかげで、包括支援プロジェクトを立ち上げることになりました。包括支援プロジェクトというプラットフォームができたことで、学校側も情報共有を行う契機になり、それ以降、再び必要な情報が共有されて活動がしやすくなりました。

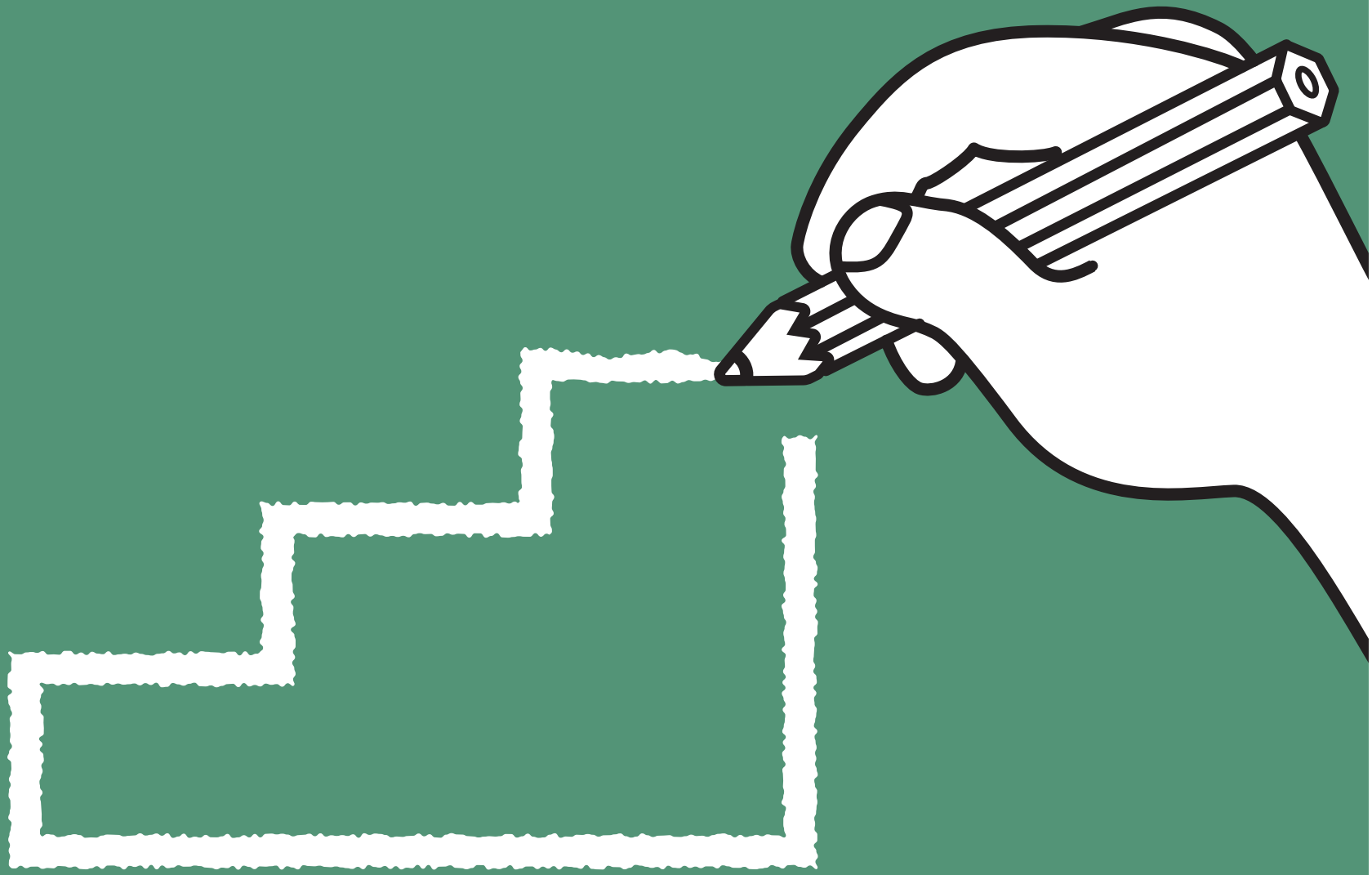
支援者のネットワークに入ることで、情報も得られるし、自分たちの活動も知ってもらえるようになりました。ネットワークに加入することで、自分たちの活動の周知にも繋がりました。保護者の方から相談を受けたときに、断るのではなく、他の団体でも紹介することができるようになりました。

居場所支援
NPO職員

スクール・
ソーシャルワーカー

定期的に居場所拠点に訪問して、子どもの様子をみています。特に、学校には来れないが拠点には来ている子どもがいるので、そうした子どもの様子を安否確認という意味も含めて確認しに行っています。

団体紹介



代表インタビュー

李炯植

りひょんしぎ
李炯植

特定非営利活動法人Learning for All 代表理事。1990年、兵庫県生まれ。東京大学教育学部卒業。東京大学大学院教育学研究科修了。2014年に特定非営利活動法人Learning for Allを設立、同法人代表理事に就任。これまでにのべ9,500人以上の困難を抱えた子どもへの無償の学習支援や居場所支援を行っている。全国子どもの貧困・教育支援団体協議会理事。2018年「Forbes JAPAN 30 under 30」に選出。

すべての子どもたちが学びと自立を保証されるように。私たちLFAと共に“課題の当事者”として「子どもの貧困」の解決を目指しましょう。

LFAの設立経緯

私自身、生活困窮世帯が多い地域に生まれ育ち「格差」や「貧困」を目のあたりにして生きてきました。障がいのある祖母と2人の兄弟と共に市営住宅で暮らし、当時は父親の仕事が安定しなかったため、薬剤師の母は毎朝4時半起きで、今でいう「ワンオペ育児」をしながらフルタイムで働いていました。登下校中に路上生活者の方が凍死して運ばれるのを目にすることもありましたし、複雑な家庭環境で育つ友人や、経済的な要因で希望する進路が叶わず、夢を諦めないといけない同級生も多くいました。「可能性があるにもかかわらず、生まれた地域や家庭環境で人生が制限されている人がいる」ということを、幼い頃から強く実感してきました。

その後、大学では、地元とは正反対の世界を目にすることになりました。私の通っていた東京大学には、世帯所得も文化資本にも持ち合わせた人が多く、日本にも「階層」があることを知ったんです。課題の現場をリアルに知る自分だからこそ「子どもの貧困」という

社会課題の解決に取り組むべきだと思い、Learning for All の活動を始めました。

LFAの歩み

一番初めに取り組んだ学習支援では、学校での勉強につまずきを抱えた子どもたちを対象に、自身のつまずきや得意・不得意、それぞれの学習スタイルに合った効果的な学習機会を無償で提供することで、学校での試験の点数向上と、希望する高校への進学を実現し、子どもたちが変わるきっかけを提供してきました。

数多くの子どもの「成功体験」作りに寄与してきた一方で、より低学年からの支援が必要な子どもたちの存在に気づき、2016年からは「居場所づくり」を行う拠点をオープンしました。居場所づくりの拠点では、様々な事情から学校や家庭で安心して育つことができない子どもたちに対して、他の子どもとめいっぱい遊んだり、栄養バランスのとれた温かいごはんを食べたり、歯を磨いたりするような、彼らが将来必要とされる“当たり前”のことに安心して取り組める環境を提供してきました。

そして居場所づくりを行うようになって改めて、子どもたちが抱えている問題は決して経済的貧困だけではなく、「つながり」「学びの環境」「育まれる環境」の喪失が複雑に絡み合う中で、子どもたちが将来自立するための成長機会を失っていることだと確信しました。そこで私たちは現在、1人の子どもが生まれてから自立していくまでの1つの生活圏に、すべての支援・機会がそろう、困難を抱えた子どもたちへの包括的支援モデル「地域協働型子ども包括支援」の構築と全国への普及に努めています。

大変有難いことに、2020年はコロナ禍にもかかわらず、多くの個人サポーター様・企業サポーター様のご協力により、支援の拠点数も増加。他の子ども支援団体様へのノウハウ提供や、支援団体同士でのノウハウ共有プラットフォームの構築も進み、団体として活動の幅が大きく広がりました。メディアで大きく取り上げていただくことも増え、調査に基づく政策提言も積極的に行っています。また、厚労省・内閣府をはじめとした省庁との勉強会、意見交換会、国会議員向けの勉強会などに登壇しましたし、菅総理への政策提言も実現しました。子どもたちの声をもとに、国の政策から社会を変えていく一歩を踏み出せています。

LFAは子どもたちにとっての、「自転車の補助輪」

子どもたちは皆、自分の力で走る力を持っています。走れるようになるまで寄り添って、私たちの存在は、彼らが大人になった時には忘れられていることが理想です。地域の子ども支援の場においても、私たちの存在が必要でなくなった時には、撤退することも考えています。

しかしながら、今の日本では、まだまだ子ども支援の量・質共に足りていません。私たちだけで出来ることには、限界があります。

いつも支えてくださっている皆様に心より感謝申し上げると共に、これからご寄付を検討いただける皆様、ぜひ私たちと一緒に、「子どもの貧困」という大きな課題に取り組む仲間になっていただけますと幸いです。

理事紹介

代表理事　李 炯植

- 東京大学教育学部卒業
- NPO法人Learning for All 創設者
- 「全国子どもの貧困・教育支援団体協議会」幹事

理事　熊平美香

- 昭和女子大学キャリアカレッジ学院長
- ハーバード経営大学院経営学修士課程修了

理事　大越一樹

- ベイン・アンド・カンパニー・ジャパン パートナー
- フランスHEC経営大学院 経営学修士課程修了

理事　鈴木 栄

- 一般社団法人SIP代表理事
- 一般社団法人JPA代表理事
- California Institute of Technology 物理化学博士号修得

監事　渡辺伸行

- TMI総合法律事務所　パートナー
- 早稲田大学法学部卒業
- ニューヨーク大学ロースクール卒業

スタッフ紹介

コミュニティ推進事業部
ディレクター
石神駿一

子ども支援事業部
ディレクター
入澤 充

経営管理部
ディレクター
辻 珠美

子ども支援事業部
マネージャー
佐藤麻理子

子ども支援事業部
マネージャー
多田理紗

子ども支援事業部
マネージャー
宇地原栄斗

子ども支援事業部
マネージャー
木村 駿

子ども支援事業部
浅野乃徳

子ども支援事業部
安次富亮伍

子ども支援事業部
新江れいら

子ども支援事業部
池田流輝

子ども支援事業部
井上優未

子ども支援事業部
片岡優衣

子ども支援事業部
菅美和子

子ども支援事業部
小池広人

子ども支援事業部
今野千識

子ども支援事業部
塩成 透

子ども支援事業部
清水 緑

子ども支援事業部
鈴木康真

子ども支援事業部
善田 緩

子ども支援事業部
竹田ゆきえ

子ども支援事業部
田尻夏希

子ども支援事業部
乕谷 萌

子ども支援事業部
中城隼人

子ども支援事業部
濱田祐子

子ども支援事業部
春川美桜

子ども支援事業部
福田 良

子ども支援事業部
緑川大二郎

子ども支援事業部
八杉祐介

子ども支援事業部
吉原聡子

経営企画事業部
岩橋美希

経営企画事業部
佃 真衣

経営企画事業部
藤井藍子

経営企画事業部
八名恵理子

コミュニティ推進事業部
岸本尚子

コミュニティ推進事業部
吉山泰子

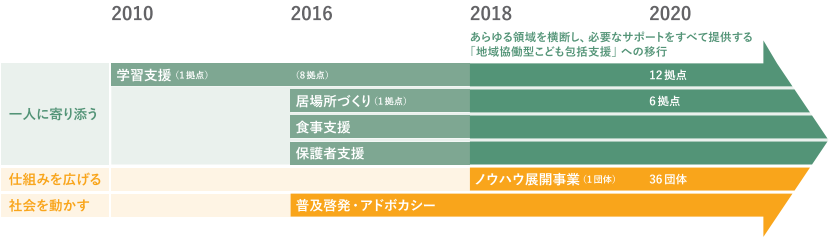
経営管理事業部
鬼澤秀昌

経営管理事業部
中川祥子

経営管理事業部
三友志織

※ディレクター、マネージャーをのぞき事業部ごと50音順に掲載

沿革



2010年　現認定NPO法人Teach For Japan内の一事業として学習支援事業を開始

2014年　NPO法人 Learning for All を設立

2016年　日本財団の子どもの貧困対策プロジェクトにおいて第1号居場所拠点を展開
食事支援、保護者支援、普及啓発、アドボカシーを開始

2018年　代表 李が「Forbes JAPAN 30 under 30」に選出
LFAの支援ナレッジを他の団体へ共有するノウハウ展開事業を開始

2019年　中高生向けの居場所拠点を開設

2021年　立ち上げからのべ9500名以上の子どもに支援を提供

サポーター企業・団体さま

Goldman Sachs Gives
MUFG 三菱UFJフィナンシャル・グループ
ORACLE
CARLYLE
WELLINGTON MANAGEMENT®
STATE STREET.
大和証券グループ
IBM
MUFG 三菱UFJモルガン・スタンレーPB証券
pwc
ECナビ
LEARNING AGENCY
DEAL
Cambridge Technology Partners

2020年活動実績

支援実績

居場所づくり
- 70人の子どもの重点支援（※ユニーク数）
- 268回 子ども食堂を開催

学習支援
- 358人の子どもを支援（※ユニーク数）
- 496名の大学生が参加

新型コロナウイルス緊急支援
- 169世帯へ1,446回生活物資支援

保護者支援
- 100世帯、2,008回の支援
（2020年4～12月に実施した、メッセージの配信数、個別相談支援実績などの総延べ数）

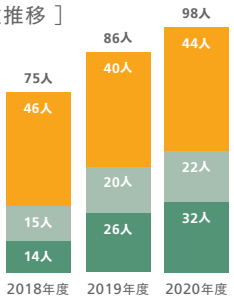
メディア掲載実績

2020年	5月19日	朝日新聞
	5月20日	読売新聞
	8月17日	NHK Eテレ「ウワサの保護者会」
2021年	1月20日	日本経済新聞 朝刊「Game Changer -挑戦者たち-」
	2月2日	NHK「ハートネットTV」
	3月8日	週刊ダイヤモンド
	5月16日	NHKスペシャル「ビジョンハッカー」
	6月10日	TBS「あさチャン!」

こちらから2020年度の掲載メディアをすべてご覧いただけます。

団体としての成長

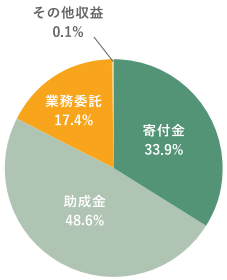
［ 従業員数推移 ］



［ 収入内訳 ］

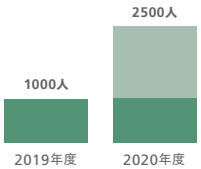
- 寄付金｜114,948,138円
- 助成金｜165,172,412円
- 業務委託｜58,991,804円
- その他収益｜426,201円

経常収益計｜339,538,555円



［ 個人サポーター数 ］

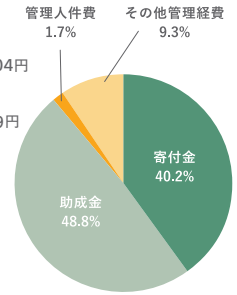
2019年に比べ、約2.5倍の個人サポーターの方にご寄付をいただきました。



［ 支出内訳 ］

- 事業人件費｜139,923,400円
- その他事業経費｜170,188,104円
- 管理人件費｜5,936,791円
- その他管理経費｜32,399,399円

経常費用計｜348,447,694円



私たちにできることはなんですか？

子どもたちを支えるために、できることはたくさんあります。
その第一歩は、まず、「知ること」。
それ以外にも、たとえばご寄付、ボランティアへの参加。
他の支援団体の方なら、LFAのノウハウを活用した
それぞれの地域での子どもサポートなど。
一人ひとりのアクションが、子どもたちの未来をつくります。

もっと知る・広める

SNSフォロー・メルマガに登録する

LFAでは、子どもの貧困について理解が深まる記事や、支援の現場からの活動レポートなどをSNSやメールマガジンにて随時お届けしています。
ぜひフォローして、いいね！ やシェアで、子どもたちの現状をもっと知り、広めていただけないでしょうか。

〈社会人向け〉活動説明会に参加する

子どもの貧困やLFAについてご関心をお持ちの皆さまに、LFAのスタッフによる無料の説明会を行っています。
説明会の前半ではLFAの活動をより深く知っていただき、後半では交流の場も設けています。お気軽にご参加ください。
※現在、オンラインで開催中です。

詳しくはこちら

自社で企業向け研修会を開く

企業にお勤めの方には、「子どもの貧困」の社会課題を学び、ともに解決策を考える社内研修を販売しています。
SDGsの取り組みの一貫としても、CSRご担当者様や人事担当者様にもご好評いただいています。
※オンラインでの開催も可能です。

お問合せはこちら

寄付する

個人サポーターになる

私たちの活動には、寄付者の皆さまからのご支援が必要不可欠です。
個人の方を対象に、「LFAサポーター（月額の継続支援）」を随時募集しています。
おかげさまで年々会員様が増えており、現在2500人の方がご支援くださっています。
ぜひ、子どもたちの未来を一緒に応援してください。

寄付の方法には、以下の2つがあります。

1. WEBサイトから寄付をする

右記WEBサイトから寄付を受け付けています。「LFA　寄付」でも検索可能です。

https://learningforall.or.jp/support/

LFA　寄付　検索

《LFAサポーター》
継続的なご支援の場合、クレジットカードによるご寄付が便利です。
お手続きは約2分ほどで完了し、いつでも寄付の停止は可能です。

1,000円/月　3,000円/月　5,000円/月　10,000円/月

《ワンポイントサポーター》
1回ごとのご支援も可能です。詳細はWEBサイトをご確認ください。

《サポーター特典》
サポーター限定のオンライン/オフラインイベントの招待、活動報告メールなど

2. 銀行振り込みで寄付をする

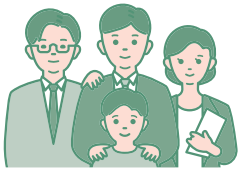
下記の口座までお振込みください。

振込先情報

［銀行名］三菱UFJ銀行　［支店名］新宿支店　［種類］普通
［口座番号］0577222　［名義人］特定非営利活動法人Learning for All
カナ：トクヒ）ラーニングフォーオール

皆さまからのあたたかいご支援・ご協力を、
心よりお願い申し上げます。

企業サポーターになる



企業の皆さまからのご寄付によって、LFA支援拠点のエリアの拡大や、ノウハウ展開事業が大きく前進しています。現在、50を超える企業、団体の皆様がサポーターになってくださっています。質の高い子ども包括支援を全国に広げるため、更なるご支援をお待ちしています。

お問合せは
こちら

LFAグッズを買う

子どもたちのアイデアで生まれたカレンダーや、活動にご賛同いただいた地域の企業様との共同制作による鉛筆など、オリジナルのグッズを販売しています。利益は全額、子どもたちの支援に使われます。ご友人やご家族にプレゼントすれば、「子どもの貧困」やLFAについてお話いただくきっかけにも。

ショップは
こちら

参加する

〈大学生向け〉ボランティアに参加する

LFAの学習支援現場では、たくさんの大学生がボランティア教師として活躍しています。
それぞれの想いを持って集まった仲間とともに、目の前の子どもに本気で向き合ってみませんか。一生ものの経験が、あなたを待っています。

詳細は
こちら

LFAの職員に応募する

様々なバックグラウンドを持った職員が、それぞれの個性や強みをいかして子どもたちのために働いています。リモートワークやフレックスにも対応。子どもたちの日々の成長にふれるやりがいの大きな仕事に、私たちと一緒に携わってみませんか。

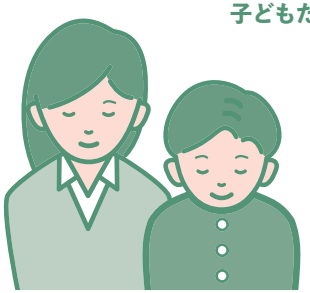
採用情報は
こちら

ノウハウを活用・共有する

もし、あなたが子ども支援者の方であるなら、p.42-43でご紹介した方法で、LFAのノウハウを是非ご活用ください。

また、逆に「こども支援ナビ」であなたのノウハウを共有していただければ、私たちにとっても、全国の支援を必要としている子どもたちにとっても、非常に大きな力となります。

**ぜひ、私たちとともに力を合わせ、ともに歩み、
子どもたちにとってよりよい未来をつくる
仲間になってください。**



Learning
for
All